め

国語，数学，理科(化学，生物)問題

はじめに，これを読みなさい。

1. これは，国語，数学，化学，生物の4科目の問題を綴じた冊子である。必要な科目を選択して解答しなさい。食料環境政策学科受験者は「国語」が必須である。
2. 問題は，数学，化学，生物については表面から82ページ，国語については裏面から14ページある。**ただし，ページ番号のない白紙はページ数に含まない。**
3. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか，受験票と照合して確認すること。
4. 監督者の指示にしたがい，解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5. 監督者の指示にしたがい，解答用紙にある「解答科目マーク欄」に1つマークし，「解答科目名」記入欄に解答する科目名を記入しなさい。なお，マークしていない場合，または複数の科目にマークした場合は0点となる。
6. 解答は，すべて解答用紙の所定欄にマークするか，または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答番号は各科目の最初に示してある。
7. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
8. 解答は，必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
9. 訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
10. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
11. **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず，必ず提出すること。
12. この問題冊子は必ず持ち帰ること。
13. マーク記入例

良い例	悪い例

国　語　問　題

はじめに裏返して表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. この問題は 14 ページあります。
2. 解答番号は 1 ～16, 101～105, 201 です。
3. 数学・化学・生物は裏面から順にあります。

国　語

（解答は解答用紙に横書きで記入すること。解答番号は 1～16 、 101～105 、 201 ）

（一）次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。解答番号は①が 101 、②が 102

① 壮大な自然の光景にイフの念を抱く。

② 彼からシサに富む言葉を与えられた。

（二）次の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。解答番号は①が 103 、②が 104

① いつもの柔和な笑顔。

② 世事に疎い。

（三）次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

家と都市、そして、国家はそれぞれに全く異なっているが、それらを境界という特性で比較することはできる。国家と家は境界を持つ。[1]境界は、人とその営みの流動を遮断する機能を持つ。周囲を境界によって遮蔽し、垂直的な階層空間を作ることが、国家と家の共通性である。家と国家は、人間の移動を制限して、ヘスティア的な居住を作り出す機能を持っている点で似ている。もちろん家は物理的な境界を持つが、他方、国家は規約的な境界しか持たず、その境界を完全に物理的に覆うことはできない。国境が制限するのは人間とそれに伴う営みだけである。

家と国家の境界は、相互に関係し合っている。家が境界を作り出すことによって、社会のなかに公と私の領域が生まれる。むしろ、公と私の境界を引き、家と国家の役割を配分したという方が正しい。そして、家も国家も、境界線を引くことによって、その外部を無視する。家と国家の境界線とは、配慮の範囲を示したものである。家の境界は、私事として自分の生活を作り上げ、自分の個人的な責任が問われる範囲である。家の外のことに関しては、個人としての私たちは責任を持たなくてよい。家の外のことに私たちが責任を負わなければならないとしたら、それはそうした社会的役割を担うことによってである。警察官も個人としては、自分の家の戸締まりだけをすればよい。空き巣がいるからといって、所轄範囲の人びとに注意を喚起するのは、その人が警官という社会的役割を果たすときだけである。国家の境界も同じ働きをする。政府や行政、司法といった国家機関のみならず、国民はしばしば他の国家の出来事に関心を持たない。責任がないからである。境界は関心の範囲に線を引くことなのである。したがって、個人の関心を家に閉じこめようとする政策は、必然的に公共心の低下を招くだろう。福祉をすべて家に担わせようとする場合にも、同じく公共心は低下する。

家と国家という場所に比較すれば、ウィルダネスと都市には、境界がないという共通性がある。そこは、ヘルメス的住み方、すなわち、移動する棲息を動物に要求する。ウィルダネスと都市は物理的にも開放された空間である。この空間では人は個人となる。

身体は、この[2]空間的特性の相違に対応した存在である。ヘスティア的住み方は、意味が与えられた、しかし運搬できない事物を自分の周りに配置し、そのなかで自己のアイデンティティに固着する。ヘスティア的人間は、価値のある事物を周囲に配置し、自分の存在のあり方をそれらに依存させる。しかしながら、それらの事物は不動であるので、自分は本来移動する「動物」であるのに、家に固執すれば移動することがあたかも自分を失うことのように思えてくる。それで、その特定の場所での習慣の積み重ね、言い換えれば、文化と呼ばれるものを自己と同一視するようになる。これに対して、ヘルメス的住み方は、いくつかの身につけられる道具だけを頼りに、移動しながら環境のなかに棲む。不動の所有物を持たない裸の人間は、自分が、天蓋と大地に依存していることを実感する。そこにある材料を拾い集めてテントを張る。しかし地球は、死の宇宙空間から居住可能な場所

を守ってくれる天井も壁もないがもっとも感謝すべき家である。

私が［ a ］的住み方を重視する哲学に対して提起したい疑問と反論は、次のようなものである。それは、ハイデガーのように、「ある場所に適応した習慣的行動が事物に意味を与え、そして、意味ある事物に囲まれることによって、私たちは自分の居場所を見つける」、こう言ってよいかという疑問である。習慣的行動も、物に囲まれた生活も、すべて［ b ］のもとにある。もし［ c ］的住み方が世界とそのなかの事物に意味を与えているとするならば、［ d ］的な住み方は価値のないものになってしまうのだろうか。ここでは、二つのことを指摘しておきたい。

ひとつは、動物における移動の根源性である。

人間は移動し続けることができないのと同じほど、いやそれ以上に、同じ場所に留まり続けることはできない。私たちは、植物のように根の生えた存在ではなく、移動し、運動し、行動する動物である。動物は自分で移動するところに本質的な特徴がある。動物は、純粋に反復的生活に留まることはできない。学習と記憶の能力が高い動物であればあるほど、なおさら単純な反復はありえない。

家を建てて、そこに住むことが成立するためには、まずは棲むことに適した場所を見つけ、素材を集めねばならない。鳥の巣作りを想起してもらえばよい。移動する存在のみが、住むことができる。植物は生えることはあっても、住むことはない。［ e ］的な住み方を基礎にしてこそ、［ f ］的な住み方が可能になる。移動しながら地球に棲むことは、特定の家に住むことに先行する。移動する存在であるからこそ、ある特定の場所に住むとか、定住するということに意味が生じる。英語の「住む(dwell)」が、もともと「放浪する(wander)」と同じ意味だったのは、移動が動物にとって根本的だからである。

[3] 住む家は、移動のなかで選択された場所である。家は、移動における周期的な帰還と休息の場所である。ヘスティアは円環の神である。休息や睡眠は、よりよい生活のためのかりそめの停止である。それが家である。移動が周期性を持ち、その行程のなかに同じ場所が選ばれているときに、家に「帰る」という言い方がなされる。移動が直線ではなく循環を生じたときには、そこに動物の家があると言える。しかし、その帰還する場所が以前とまるで違っていたならば、空間的には同一でも「帰った」ことには

ならない。たとえば、故郷の風景があまりに以前とは変わってしまい、新しい建物や見知らぬ人びとばかりになってしまっていたならば、それは改めて訪問する場所であっても、帰る場所であるとは言えない。

したがって、帰る場所には、ある程度の通時的な同一性が必要とされる。故郷には、移動する者の円環的リズムを形成するために、保守的であることが要請されている。人はしばしば円環性・回帰性に安心を覚える。本当は、宇宙は円環せず、何ひとつとして回帰することなどない。実際に、物は壊れると復元せず、生き物は死ぬと帰ってこない。直線は世界の峻厳たる事実を知らしめる。ヘルメスは直線の神である。[4] 彼はきっとファッショナブルなはずだ。円環性と帰郷とは、人間的な、あるいは、動物的な欲求に応えるための秩序である。

ここで問い質すべきは、定住が正常状態であり、移動がそこからの逸脱であるという定住中心的な常識である。あるいは、円環的生活が通常であり、直線的生活がそこからの逸脱なのかということである。そして、自分の存在の根源を為すのは、故郷と呼ばれる最初の定住場所のことだとする常識である。ここで私は、ヘルメス的住み方の根本性を主張したい。所有的で固定的な居住に対して、移動する棲息が先行すべきである。私たち人間は、根本的に、より良い場所を探して移動する存在だからである。人生は旅であるというのは、抒情的な感慨ではなく、生のリアリティである。移動する存在があるからこそ、ヘスティア的な場所は維持できる。家も国家も、移動する者たちが境界を支えている。そして、もし世界が戻ることのない進行を続けているのでないのならば、私たちが円環に心のよりどころを求めることもないだろう。

さて、「意味ある事物に囲まれることによって、私たちは自分の居場所を見つける」について私が第二に指摘したいことは、意味のないものの価値である。すでに意味を担っているものに囲まれる生活とは、習慣と回帰的な秩序を基盤にしたヘスティア的住み方である。これに対して、ウィルダネスは、人間の有用性の観点からは価値を認められない荒涼たる場所である。ウィルダネスでは、廃墟のように剥き出しの諸存在が、美しく、神々しく、それ自身の価値を主張している。[5] ディープ・エコロジーは、人間の意図とは独立に自然そのものに価値が宿っていると主張する。それは、人間の視点からは無意味であったり、反価値となったりするような存在に対しても価値を認める。この考えは、意味あるものとは人間が作り出したものだとする考えを捨てられ

ない者には理解できない。

では、意味のあるものとは何だろうか。それは関連性のもとに置かれること、文脈の中に位置づけられることである。逆に、無意味なものとは、周囲との関連性を失い、孤立してしまったもの、そして、それゆえに相対的な位置づけをもたなくなったもの、言い換えれば、絶対的なものである。しかし、本来、他者とは、こうした、隔絶していて、外からの意味づけを拒む存在である。私たちは、何かを関連づけ、意味づけることで理解しようとする。自分の人生を社会の文脈に埋め込むことで、人生に意味を与えようとする。他者に対して、その人の履歴や経歴、社会的役割や地位、人間関係といった文脈で意味を与えようとする。自分についても同じような社会的文脈のなかでアイデンティティを獲得しようとする。

しかし私たちが、移動できるのは、私たちが周囲の環境から独立した存在だからである。私たち個々の存在は、身体という境界によって周囲から隔てられている。この境界は、家の壁とも国境とも違い、生命としての自己を成立させている境界である。私たちは、特定の場所に生まれ、特定の社会の中で、その慣習を身につける。しかし、そこから移動できる。移動することで、私たちは新しい環境とインタラクションし、古い場所や文脈から少なくとも部分的には切断される。そうして、私たちは新しい存在となる。私たちは古いという理由だけで新しいファッションに身を包み、それまでと異なった自分を誕生させる。

6 こうした存在の更新ができるからこそ、私たちは新しい場所に住むことができるのだ。

周囲との関係性を切るもの、孤立するもの、無根拠なものとは、すなわち、個体だということであり、生物だということである。そして、無意味であると同時に絶対的であることの最終的な根拠とは、私たちが死ぬということにある。死ぬ存在であるということは、裏を返せば、個体として生きているということである。この死すべき個体であることが、無意味性と無根拠性、また、独立性と絶対性を湧出するのである。ウィルダネスは、何かと何かをつなげる接続の場所であり、伝達の場所である。ヘルメスはコミュニケーション、伝達、交換の神である。ウィルダネスで接続が可能となるのは、そこでは、移動すること、個体であることが前提となっているからである。コミュニケーションは独立した存在の間でしか成立しない。コミュニケーションは、交信者どうしを結びつけると同時に、それらのあいだの独立性と絶対性を明確にする。これに対して、ヘスティアはきっと無口

なはずだ。

（河野哲也『境界の現象学』による）

〔註〕

○ヘスティア……ギリシャ神話における竈（かまど）の神

○ウィルダネス……荒野　荒れ地

○ヘルメス……ギリシャ神話における商業・牧畜・旅などの神

○ハイデガー……ドイツの哲学者（一八八九～一九七六）

○インタラクション……相互作用

問一　傍線部1「境界は、人とその営みの流動を遮断する機能を持つ」とあるが、その機能やそれがもたらす結果の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 1

A　境界線が引かれることによって、私事としての自分の生活が作り上げられ、公的な責任の範囲も物理的に明確になる。

B　境界線が引かれることによって、人の社会的な役割の範囲が明確にされ、公共心が高められる。

C　境界線が引かれることによって、配慮や関心の範囲に線が引かれ、その外部が無視されるようになる。

D　境界線が引かれることによって、習慣や文化が定着し、そこに住む人間の独立性が確立される。

E　境界線が引かれることによって、人間の無秩序な移動や営みが制限され、安定した階層社会が維持されるようになる。

問二　傍線部2「空間的特性の相違」とあるが、この「相違」に応じて区別されている事柄の組み合わせとして**不適切なもの**はどれか。次の中から**一つ**選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 2

A　公と私
B　国家と都市
C　家とウィルダネス
D　円環的生活と直線的生活
E　ヘスティア的住み方とヘルメス的住み方

問三　空欄a～fには、「ヘスティア」か「ヘルメス」のいずれかが入る。「ヘルメス」が入る空欄の組み合わせとして**適切なもの**はどれか。次の中から**一つ**選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 3

A　bとd
B　cとe
C　dとf
D　cとf
E　dとe

問四　傍線部3「住む家は、移動のなかで選択された場所である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 4

A　住む家は、人間にとってなくてはならない根源的な空間として探し出された場所であるということ。
B　住む家は、所詮、仮そめのものであり、終のすみかにすることは出来ない場所であるということ。
C　住む家は、絶えず移動を繰り返すことにより、試行錯誤のすえにようやく見つけられる場所であるということ。
D　住む家は、移動する者だけが持てるものであり、そうした営みの中で初めて意味を持つということ。
E　住む家は、動物的な欲求に基づくものであり、直線的な生活を行うための場所であるということ。

問五　傍線部4「彼はきっとファッショナブルなはずだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 5

A　ヘルメスは価値がないと思われるものに新たな意味を見出せるような、優れた美的感覚を持っているということ。
B　ヘルメスは身体という境界をもつことで、責任ある個人として生きることができるということ。
C　ヘルメスは先進的な存在であり、移動することで新しいスタイルを生み出し続けるということ。
D　ヘルメスは古いものにしばられず、よりよい場所や新しいあり方を見出し続けるということ。
E　ヘルメスは流行に敏感であり、新しい価値を見出すことに長けているということ。

問六　傍線部5「ディープ・エコロジー」とあるが、この考え方が本文において果している役割はどのようなものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 6

A　自然は文化や意味に縛られて生活している人間を癒し、精神状態を安定させる、ということに気づかせる。
B　自然そのものが持つ連関性を見直すことによって、持続可能な社会の実現を目指す、という態度を促す。
C　自然とは荒涼とした場所のことであり、そのような場所にこそ真の価値が宿る、という視点を提供する。
D　自然が持つ神々しいまでの美しさは、人間の力によって作り出すことはできない、という真理に目を開かせる。
E　自然それ自体の価値を認めることによって、人間の視点を相対化する、という可能性に目を開かせる。

問七　傍線部6「こうした存在の更新ができるからこそ、私たちは新しい場所に住むことができるのだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 7

A　人間には、既存の関係性を断ち切り、その都度の社会的文脈に応じて新しい自分になることが可能であるからこそ、人は新しい環境へと移住することができる。
B　人間には、環境に応じて新しい生活を生み出す能力があり、また、さまざまな社会の慣習に適応する能力があるからこそ、人は新しい場所に住むことができる。
C　人間には、周囲の環境から自己を隔てる身体という境界があり、それによって環境から独立した個人となるからこそ、人はヘスティア的な住み方を確立することができる。
D　人間には、心のよりどころとなる家や国家があり、人はそのような場所に帰還しリフレッシュできるからこそ、新しい知見や出会いを求めて旅に出ることができる。
E　人間には、移動によって新しいアイデンティティを身につける能力があり、移住を続けることによってこそ、人は生きているということを実感することができる。

問八　次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 8

A　家と国家はともに境界を持つが、前者は物理的な境界によって閉じた私的空間を作り出すのに対して、後者は規約的な境界によって開かれた公的空間を作り出す。

B　人間は安定した円環的秩序に安らぎを覚える存在だが、宇宙は円環せず、人間の生の根源は移動にある、ということが見直されねばならない。

C　人間が移動することを望むのは、動物的本能から逸脱した存在だからであり、さらに知的な能力が高いため、新しい世界とのインタラクションを享受することができる。

D　定住場所ができることによって、変わらない故郷を望む保守的な意識が芽生えるが、同時に都市という解放された空間を作ることで、人は自由な生を享受しようとする。

E　ウィルダネスは有用性の観点からは価値のない場所であるがゆえに、人はそこにおいて常識のしがらみから解放され、社会的な生き方を捨て去ることができる。

（四）

次の文章は源氏の君が都を離れ、須磨へ退去した際の様子を描いたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

須磨にはいとど心づくしの秋風に、海はすこしとをけれど、[1]行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、よるよるはげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、[2]ひとり目をさまして枕をそばだててよもの嵐を聞き給ふに、[3]波ただここもとに立ちくる心ちして、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりにけり。琴をすこし掻き鳴らし給へるが、[4]我ながらいとすごう聞こゆれば、[5]弾きさし給ひて、

恋わびて泣く音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたうおぼゆるに、しのばれで、あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親はらから、片時たち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへるとおぼすにいみじくて、[6]いとかく思ひしづむさまを心ぼそしと思ふらむとおぼせば、[7]昼は何くれとたはぶれごとうちのたまひまぎらはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をし給ひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまざまの絵どもをかきすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。

（『源氏物語』）

〔註〕

○行平の中納言……在原行平。業平の兄

○あいなう……何ということもなく

○ほどにつけつつ……それぞれの身分に応じて

問一　二重線部イ～ホのうち、**完了の助動詞「ぬ」**に当たるものを**一つ**選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 9

A　イ　　B　ロ　　C　ハ　　D　ニ　　E　ホ

問二　傍線部1「行平の中納言の」とあるが、「中納言の」が掛かる単語を本文中から一語、抜き出して答えなさい。解答番号は 105

問三　傍線部2「ひとり目をさまして」とあるが、この場面における源氏の君の心情として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 10

A　秋風にのって聞こえてくる波音に煩わされた。
B　秋風によって物思いをかきたてられた。
C　秋風のせいで亡き人への思いが蘇ってきた。
D　秋風のために夜の静けさがより一層感じられた。
E　秋風が吹くたびに嵐の様子が気になった。

問四　傍線部3「ただ」のここでの意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 11

A　わずかに　　B　たんに　　C　そのまま　　D　ひたすら　　E　すぐ

問五　傍線部4「我ながらいとすごう聞こゆれば」の解釈として最も適切なものを次の中から**一つ**選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 12

A　自分ながら、すばらしい曲に聞こえるので
B　自分ながら、とてもいい音色に聞こえるので
C　自分ながら、不気味なものに聞こえるので
D　自分ながら、ひどく寂しく聞こえるので
E　自分ながら、大変悲しい曲に聞こえるので

問六　傍線部5「弾きさし」と傍線部7「思ふ」の主語と考えられるものを、それぞれ次の中から**一つ**ずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は傍線部5が 13 、傍線部7が 14

A　帝　　B　都に残した人　　C　付き人　　D　親・兄弟　　E　源氏の君

問七　傍線部6「おぼすに」とあるが、その内容を表す部分を本文中から抜き出し、その**最初**と**最後**の**五字**をそれぞれ解答欄に記入しなさい（なお、句読点や記号等がある場合は、それも一字とする）。解答番号は 201

問八　次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 15

A　源氏の君は、冗談を言って付き人たちの気を紛らわそうとしている。

B　源氏の君は、都に残してきた親・兄弟のことが気がかりで仕方がない。

C　源氏の君は、都の方から風が吹いてくるたびに一人涙をこぼしている。

D　源氏の君の琴の演奏が予想以上にすばらしかったので、付き人たちは驚いた。

E　源氏の君が思い悩んでいるので、付き人たちは気晴らしに手習いを勧めた。

問九　次の中から『源氏物語』と同時代の作品を一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 16

A　風姿花伝　　B　保元物語　　C　平家物語　　D　栄花物語　　E　新古今和歌集